

## 第4回 練馬区地域コミュニティ活性化プログラム検討懇談会によせて

平成22年8月8日

森本 陽子

### 議題： 町会・自治会について

#### 1. 現状と期待すること

町会や自治会といった本来自分が住まう住居に極めて密着した、半ば避けられない縛りをもったコミュニティと自分の価値や趣味といった主体的に帰属組織を自らつくったり、選択したりする自由度が高いコミュニティとは、自ずとその果たす機能が違ってくるように思います。

現在は、町会や自治会への参加は「ほどほどに」といったところが大筋の捉え方ではないでしょうか。自分の例をとってみても町会への参加は、決して多くはありませんし、日常生活をおくる上での最低限のかかわり程度になっています。これはあまりに近いが故に、つきあいの深さ（のめりこみ度、使う時間、関係する人々の数など）においては、極めて浅く、少なく、薄くしておきたいという本音があるようにも思います。

ご近所付き合いでは、とくに両極端に位置づけられているハレとケの場面、すなわちイベント（各種の行事や祭りなど）や葬儀への参加などが挙げられますが、このあたりだと町会・自治会すなわち「ご近所」単位のコミュニティが少しはみえてくるように思います。しかし、行事数は年々減るばかりです。

本来、農村型村社会の基盤であったこうしたつながりが、半世紀をかけた都会型ムラ社会形成過程においてすっかり崩れてしまい、「核家族」と「企業社会」という2つの都会型ムラ社会の流れが、加速度を増しているのが現状です。一気に元へは戻ることにはなかなか難しい。しかし、今回の東北大震災の災害後や社会が抱えている様々な問題（不明高齢者、自殺、ひきこもり、乳幼児虐待、いじめ、うつ病、孤独死、直葬など）を考えるにつけ、改めて「ご近所」コミュニティの「機能」に期待し、これらの課題解決の下支えの力となることを強く望みたい。しかしながら町内会や自治会といった一番身近なコミュニティは、長い時間をかけて慣れ親しんだ「個イズム」の対極にあり、いわば「公」教育の原点で、一番われわれ日本人が不得手とする課題であることも確か。

行政とともに区民がともに議論をし、公助にだけ頼るのでなく、自助および共助の仕

組みづくりをしていかなければ立ち行かない様々な課題を抱えた現在、まず身近なコミュニティである町会や自治会の機能見直しをしながら、多様な組織への関心や参加および実践を促すために、積極的に区民には情報提供をする必要がある。掲示板や回覧板のより一層の活用は必須。また様々な活動団体の連携や協働といった一連の社会活動へのうねりを若者たちを巻き込んだものにしていくことが必要であり、この動きは近年少しずつ各種 NPO 活動やボランティア活動分野では、みられるようになってきたようにも思います。ただし町内会や自治会といった身近コミュニティには、まだまだあるいはまったくという状況であり、これが一番難しいことかもしれない。

## 2. 具体的活動

1 町内会ですとあまりにも近すぎ、かえって顔見知りであるが故の窮屈さに足が遠のくケースが多いように思う。従い、ブロック単位あるいはいくつかの町会で合同の催しなど企画することもよいのではないか。

衣食住遊交など今話題のテーマで住民参加の機会をつくる。ただ情報の提供だけではなく、その後参加者同士が交わり、意見を交換したり、知り合ったりできるワールドカフェスタイルで場づくりを行いながら、お互いの課題を共有し、その後の参加意欲の醸成を図る。理解してもらえる仲間との出会いは、コミュニティがもつ潜在力のひとつ。

若手育成、参加の機会をつくるために、各町会のテーマごと部会への児童・生徒・学生の参加と彼等の発言の機会をつくる。

特に際立った企画と参加者が多かった企画について、町内会、自治会代表による発表会を行い、相互の連携および活性化を図る。